

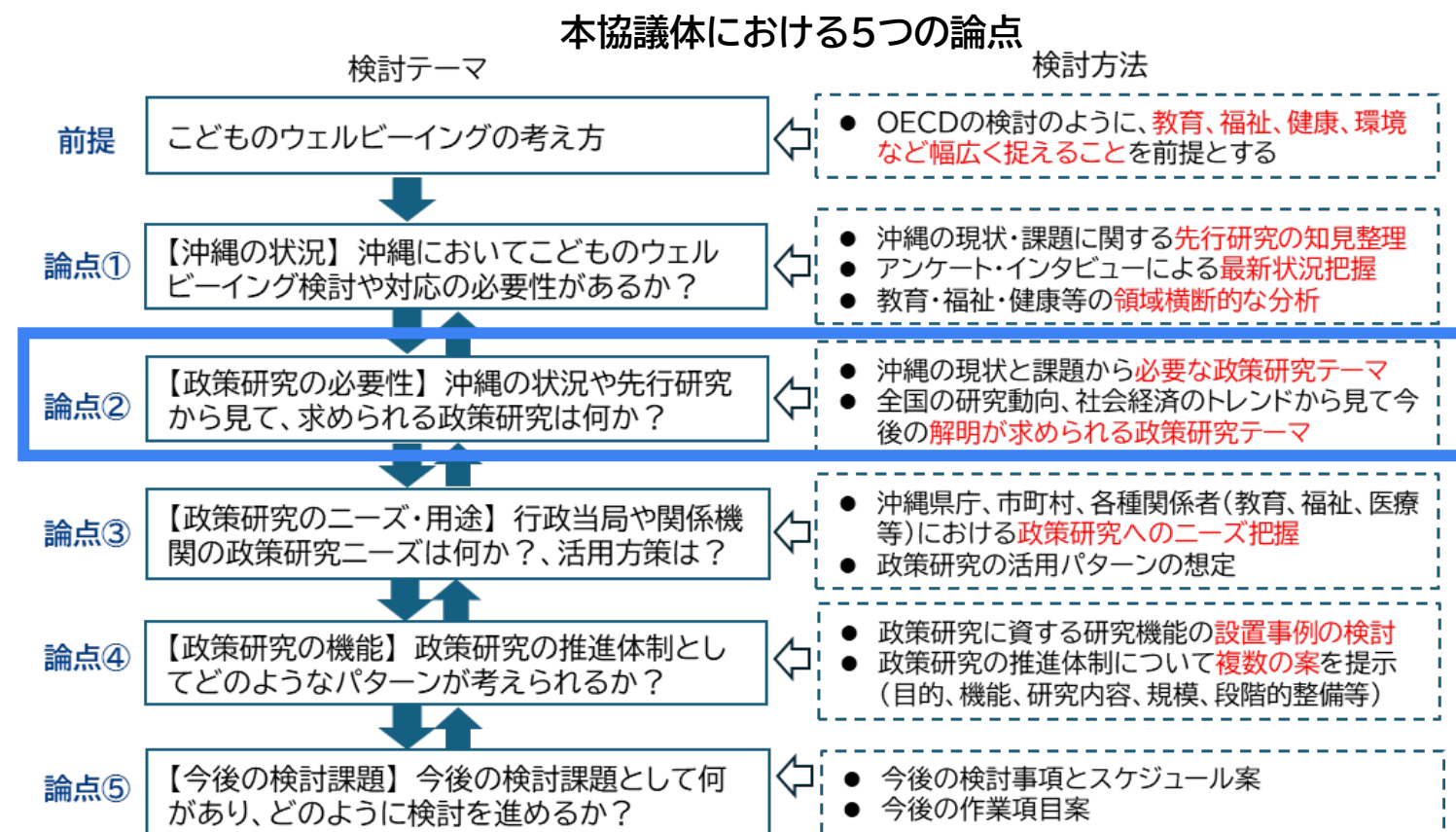
本日の討議事項、前回の振り返り等

目次

1. 検討の進め方	3
2. 本日の議論の流れ	4
3. 本日の議論にあたっての前提	5
4. 第2回協議体でのご意見	6
5. 前回の振り返り	7

1. 検討の進め方

- 第3回協議体では、全国の政策研究課題や政策研究テーマの例を踏まえ、解明が求められる政策研究を明らかにする。加えて、持続可能な研究体制の在り方を検討する。



協議体の開催スケジュール

各回 (日程候補)	各回の検討テーマ、議題(論点番号は左図と対応)
第1回 (令和7年 6月25日)	事業の目的を踏まえ、ウェルビーイングを導入する意義を明らかにしたうえで、協議体での本年度のゴールを共有する。(前提)
第2回 (令和7年 8月29日)	既存調査・研究から見た沖縄のこどもの現状・課題を踏まえ、沖縄におけるウェルビーイング導入の必要性を明らかにする。(論点①②)
第3回 (令和7年 10月27日)	全国の政策研究課題や政策研究テーマの例を踏まえ、解明が求められる政策研究を明らかにする。(論点②) 追加して、研究体制の在り方を検討する。
第4回 (令和7年 12月12日)	第3回の事例に追加し、各種関係者へのヒアリング結果も踏まえ、沖縄におけるこども施策向上のためのニーズや活用方策を明らかにする。(論点②③)
第5回 (令和8年 2月中旬)	これまでの議論を踏まえた年度総括を行い、政策研究を推進する体制のあり方について整理するとともに、今後の検討課題を明らかにする。(論点④⑤)

※青字は今回追加。

2. 本日の議論の流れ

- 沖縄のこどものウェルビーイング実現に向けた取組を持続可能なものにしていくため、PDCAサイクルの在り方、研究テーマや研究体制、また、例えば「ポジティブ・デビアンス」アプローチを活用することなどについて、意見交換を行う。

事務局 説明

資料3

(2) ヒアリング結果、政策研究テーマ例

- ・ ヒアリングから得られた沖縄のこどもの課題を共有。
- ・ 全国の政策研究課題や政策研究テーマ例を共有。

国立成育医療研究センター竹原構成員 講演

資料4

(3) こども・若者のこえを中心にしたPDCAサイクルで
実現する持続可能な支援体制

- ・ WBにまつわるこどもと親の関係について研究内容を説明。
- ・ こどものWBを高めるためのPDCAサイクルについて説明。

公立大学法人静岡社会健康医学大学院大学
厚生労働省 参与 溝田友里准教授 講演

資料5

(4) こどものウェルビーイングの実現に向けて
ーこども政策への「ポジティブ・デビアンス」の活用ー

- ・ 「ポジティブ・デビアンス*」アプローチの考え方・事例を説明。

*「ポジティブ・デビアンス」:同じ状況の集団の中で良い状態にある者に着目し、その行動や環境などを分析し、広めることにより問題解決を図ること。

意見交換

- ・ 沖縄のこどものウェルビーイング実現に向けたサイクル(こどもに関する意見・データ収集、政策実行、評価、改善)を実現するために、必要な研究体制の機能は何か。
- ・ 沖縄において、こどものウェルビーイングの実現に向け、例えば「ポジティブ・デビアンス」アプローチにより、地域の中から成功事例を発見し、広げていくためには、どのような研究を行うのがよいか。
- ・ 沖縄のこどものウェルビーイング実現に向けて、資料3p.15の一覧も踏まえ、それぞれの立場で期待する政策研究テーマは何か。

3. 本日の議論にあたっての前提

- 「ウェルビーイング」とは(再掲)
 - 「ウェルビーイング」: 身体的・精神的・社会的に満たされた状態を指す。(WHO定義)
 - 「ウェルビーイングの考え方」: こどもの「ウェルビーイング」に影響を与える要素を整理すること。
「こどものウェルビーイングの考え方」では、関連する要素が多層的に表現されることが多い。
- 沖縄における「こどものウェルビーイングの考え方」のあるべき姿
 - 「こどものウェルビーイング」の実現に向けては、沖縄のこどもや保護者の意見が欠かせない。
 - その際、「やりたいこと」と「客観的に必要なこと」を把握し、沖縄における「こどものウェルビーイングの考え方」のあるべき姿(例: 夢を持てるか等)を検討する必要がある。

	例示
こどもが「やりたいこと」	嫌いな食べ物を食べたくない。でも野球選手になりたい。
こどもにとって「客観的に必要なこと」	バランスのよい食事によって身体をつくり、夢をかなえる。

4. 第2回協議体でのご意見

(求められる研究スタンス) データに基づく分析の必要性	● データが集まることを前提にWBを考えること、身体的・精神的・社会的プラス幸福感という分析が必要。 ● 支援とデータのリンクがないため、どの程度の介入、どのような支援が有効だったのか結果が分からない状況。 ● 複数地域での比較、支援を受けた人と受けていない人の差異を見るといったデータに基づく検討が重要。
(研究の視点) 検討の進め方(こどもの声の解析、目標設定、バイオ・サイコ・ソーシャル等)	● こどもが夢を持てる社会を作り、大人がその夢を潰さない社会の構築が重要。「夢」よりもきちんとしたスケールが必要。 ● 何があったら一番助かったと保護者が思ったかが見えてくると、もっと積極的に関われるのではないか。 ● こどもの声を集め、協議体を活用しつつ、それを解析し、政策への反映、効果の検討に使う仕組みが重要。 ● バイオ・サイコ・ソーシャルモデルでは、ソーシャルにはいくつかの要素があるところ。
(沖縄における問題点) 幼少期からのキャリアビジョン形成の課題	● 18歳で高校を卒業すると島外・県外に出るがメンタルがやられて帰ってしまうことが多い模様。 ● 県外の研修会には地理的、費用的な問題で参加しにくいという問題。 ● 産業の種類が少なく、就職先・就学先の選択肢が狭まることで、本人たちが気付かずに制限を受けている。 ● 小学生・中学生のころから県外進学や留学について知ることができれば努力する時間があつたのではないかという声あり。 ● 自己肯定感が上がっている印象はあるが、将来に対する不安感が逆に増しているという結果もある。
(沖縄における問題点) 支援の仕方の工夫の必要	● 支援が必要な家庭の保護者からは支援は不要との声があり、対応しにくい面がある。 ● こどもの経験値が絶対的に不足、周囲の大人が環境をつくる必要。 ● 精神的支援を求める声が小中高生ともに3割前後あり、対応が必要。
その他	● こどもに多様な体験をさせるため、自治体ごとに体験事業が必要。 ● 子育ての環境を測る指標として「この地域で今後子育てしていきたいと思うか」といった項目も考えられる。

5. 前回の振り返り①

- 沖縄のこどもの課題は、その内容によって分類すると、「家庭」、「学校・保育所・施設」、「地域社会」、「その他」の4つの大分類と15の小分類となった。
 - こども自身が課題の原因にならない場合、こどもの環境がこどもに影響を及ぼすと思料した
 - 「こどものウェルビーイング測定の概念的フレームワーク(OECD)」では、こどもの環境(レベルC)として、「家庭・家庭環境」、「学校・ECECの環境」、「地域社会・物的環境」と設定されている

➤ 課題の大分類・小分類と考えられる課題

※ 課題を分類する場合には、複合的なものも含まれる(例: 家庭環境に起因する学校での課題等)が、ここでは課題の主たる対象を基準に便宜的に分類した。

家庭

- 食事・健康
- 医療アクセス
- 親の困難
(離婚・ストレス・虐待・ネグレクト・経済状況・就労状況・無関心)
- 住居・近隣地域の問題
- 自覚・自己肯定感

- ・ 低所得層に対する食育や運動の推進・支援
- ・ 受診抑制を減らすための医療政策課による計画との整合性や小児科医の確保の充実
- ・ ひとり親家庭や経済的な困窮家庭における親のダブルワーク・トリプルワークの解消方法の必要性
- ・ 家事援助ヘルパーやアウトリーチ型の家庭相談の充実等、低所得世帯が頼れる相手の検討
- ・ 経済状況での格差が生じずコミュニティの活性化にもつながる地域イベントの各地域での開催・参加促進による体験・経験の地域間格差の解消の必要性
- ・ 貧困状態や虐待やヤングケアラーに関するこどもの自覚の必要性についての検討、(親子への)こどもの権利の周知

5. 前回の振り返り②

➤ 課題の大分類・小分類と考えられる課題

学校・保育所・施設

- 学力・学習支援・キャリア教育・ライフプラン教育
- 進学・就学支援・就労支援・自立支援
- インクルーシブ（障害・病気・外国人等の受入態勢）
- 保育・教育現場の制度・体制
- 保育士・教職員以外の支援者の制度・体制

- ・ 発達段階に応じた学校等でのキャリア教育や職業観の育成、就労意識の向上に資する方法の検討および実行
- ・ 困難や課題を抱えるこどもの様々な背景・要因が重なり複雑化している場合の専門的なアセスメントやケア・支援、親への包括的な支援
- ・ 進路未決定や中途退学に繋がる複合的な背景をもつ生徒に対する、早期段階での積極的なアウトリーチによる支援の必要性
- ・ 発達障害や発達が気になるこどもに対する発達段階に応じた高い教育・保育を提供できる体制整備
- ・ 教職員の多忙化・過負担による疲弊への対策
- ・ コミュニティソーシャルワーカー、ファミリーサポートセンター等自治体を基盤とした家庭支援の拡充・周知の徹底

地域社会

- 居場所（サードプレイス）（学童・こども食堂等）
- 歴史・文化・価値観（集団意識）
- インターネット・SNS・ゲーム利用

- ・ 居場所を失う可能性のあるこどもへの就学時前からの予防と既に居場所を失い問題が複雑化した中高生へのアプローチの強化に関する方法の必要性
- ・ 親の状況や親の価値観の刷り込み（早婚・若年出産等）に対して物事を適切に判断する力の低学年からの涵養
- ・ こどもの居場所の運営支援の継続・発展等により「体験格差」を埋めるなど低所得層であっても将来の選択肢を狭めない時間の使い方ができる施策の必要性

その他

- 行政手続き・周知
- データ不足

- ・ 生活保護取得基準に関する沖縄県の地理的背景（車の必要性等）を考慮した見直し
- ・ 量的・質的研究における学術的なデータや検討の充足

未来を問い続け、変革を先駆ける

MRI エム・アール・アイリサーチアソシエイツ